泉隆寺（せんりゅうじ）・若菜の里　中尾町

山号を超音山といい、浄土真宗本願寺派の末寺で、俗に若菜寺として知られている。寺の縁起によれば、1262（弘長 2）年に僧西順が建立したといわれ、当初は真言宗の寺院であった。それが、1471（文明 3）年にたまたまこの地を訪ねた蓮如上人に時の住職が帰依し、以後浄土真宗の寺となる。さて、醍醐天皇の 910（延喜 10）年に、この地で採れる若菜（ 春の七草のひとつ、すずしろ＝大根の葉、後に言う熊内大根の葉のこと）を宮中に献上し、以後これが習わしとなった。これは、正月の七日に食べる餅に若菜を添えると胃にもたれないといい、各地の若菜を吟味した結果、当地の若菜が一番よいということになったからである。源平の争乱でこの風習も一時とだえたが、蓮如上人がこれを復活。以後、この寺から西本願寺を通じて宮中にこの地の若菜が献上され、幕末まで続いた。こうしたことから俗称の若菜寺の名が付いた。今、境内には蓮如上人腰掛石があり、その脇に上人作と伝える「旅人のみちさまたげは津の国の　生田の浦の若菜なりけり」（この歌は藤原師輔の改作という）という歌碑が建っている。

今でも毎年 1 月 7 日には、境内の一角の畑で採れた「すずしろ」を入れた「七草粥法要」が行われ、参拝する人々にふるまっている。

場所：中尾町 11-21

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著